

新古今歌人による『伊勢物語』歌「宇津の山」の享受について

佐藤茂樹

はじめに

『伊勢物語』第九段の「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」は、『古今集』に入集することはなく、『新古今集』に本例歌、およびその本歌取り歌三首が入集するまで、勅撰集に影響歌は見られない。『水無瀬恋十五首歌合』三三番右歌判詞に「宇津の山うつ、かなしき」など侍、近來、宇津の山越、あまたきこえ侍にや」とあるように、新古今時代には多くの影響歌があったことが分かる。この業平歌は新古今歌人たちによって、価値が見出され、活用されたと言える。もともと、忠岑に「するがなるうつつ山のうつつにもゆめにもひとをみてややみなむ」（『忠岑集』五二）の歌があるが、片桐洋一氏が考察されたように、業平歌は、『古今六帖』や、『忠岑集』にある歌の異伝^{〔1〕}と見るべきである。本稿では、新古今歌人たちによって、この業平歌がどのように享受されたのかを考察する。

一

『六百番歌合』の二首が最初の影響歌である。

① 宇津の山こえしむかしのあとふりてつたのかれ葉に秋風ぞ吹く（秋 六番左 女房）

左、宇津の山むかしの跡思ひいで、つたのかれ葉に秋風ぞ吹くといへる、心ことにえんに侍るべし

② 宇津の山ゆふこえくればみぞれ袖ほしかねつあはれこのたび（冬 廿四番左 顕昭）

袖ほしかねつあはれこのたびといへる、さびてはきこえ侍るを、このうつつ山こそよりどころなくや侍らん、伊勢物語などに、うつつ山べのうつつにもなどいへる所にもみぞれふれりとも見えず、そのゆゑなきならば、みぞれふりぬべからん山も、あはれこのたびといはん所もおほく侍らんかし、うつつ山ゆゑなくは、さまでよりどころなくや侍らむ（中略）左右共、うつつ山もかたのみのもいづくにてもありぬべく聞ゆ

①の良経歌は、判詞に「宇津の山むかしの跡思ひいで」とあるように、『伊勢物語』九段を着想に置いている。能因歌「こころあらむ人にみせばやつくのくにのなにはわたりのはるのけしきを」（『後拾遺』春・四三）を踏まえた、西行歌「つくのきの難波の春はゆめなれやあしのかれはに風わたるなり」（『新古今』冬・六二五）に似た構想が窺える。西行は、能因が讃えた難波の春の景色とすっきり様変わりした冬枯れの難波の景色を捉えて、「あしのかれはに風わたる」という無常観的心情を表したのであった。良経歌の上句の「こえしむかしのあとふりて」とは、西行同様、業平の見た「いと暗う細きに、蔦・かへでは茂り」（『伊勢物語』九段）という景色はすっかり変わって、「つたのかれ葉に秋風ぞ吹く」景色であったと詠じる。

業平歌の中心的抒情である「うつつにも夢にも人にあはぬ」といった歎きは直接的には詠じられていない。しかし、「宇津の山」を詠み込んでいる点に、業平歌への意識がある。夢にでも逢えないという事実を飽きられたからとして捉え、歎きの思いを蔦の枯れ葉に秋（飽き）風吹く秋の季節という叙景

表現で表したのである。業平の旅恋の歌における望郷の思い、とりわけ都に残してきた思い人への歎きの感情を、叙景表現中に込めたのである。季節は杜若咲く夏から、蔦紅葉が枯れる晩秋へと変え、寂しい心情の心象風景となる。定家の本歌取り論の「以恋・雑歌詠四季歌」（『詠歌大概』）に合致している。

②の顕昭歌は、業平歌の詮ともいべき「夢」「蔦」が詠まれておらず、新しく「雲」「袖」が詠み出されている。そのため、俊成の判詞にも、「このうつの山こそよりどころなくや」と批判され、具体的には「うつの山べのうつつにもなどいへる所にもみぞれふれりとも見えず」と否定されている。「宇津の山」を詠出する限りは、『伊勢物語』に依拠する具体的表現の必要を説いている。

この見解に対して、顕昭は『六百番歌合 顕昭陳状』において、次のように反論している。

今（の）歌（筆者注、顕昭歌のこと）は、彼（の）山の心細きかたを雲に引（き）寄せて侍れば、此（の）難侍（る）べからず。

雲降ると着想したのは、「宇津の山」が『伊勢物語』において、「わが入らむとする道は、いと暗う細きに、蔦・かへでは茂り、物心細く」とある「心細さ」を「雲降る」具象的な景に込めたというのである。「宇津の山」に拠り所がないのではなく、むしろ、業平歌「宇津の山」に発想を置いた歌であると言う。さらに、次のように言う。

さる歌（筆者注、業平歌のこと）有ればとて、強に「宇津の山辺のうつつ、にも」と詠まば、無下の古歌に成（り）侍（り）ぬべし

俊成が主張するように、業平歌の具体的表現に依拠すれば、業平歌と変わらない歌となってしまうと顕昭は考えている。いわゆる本歌取り歌は、古歌と同じであつてはならないとする考えがあつたことが分かる。顕昭の創作論に立つて、例歌を考えると次のように解釈することができる。上句の「宇津の山ゆふこえくればみぞれふり」とは、『伊勢物語』の「いと暗う細きに、蔦・かへでは茂り、物心細く、すずるなるめを見ることと思ふ」道に夕べとなり、その上、雲まで降り、さらに心細さは増すと詠んでいる。また、四句「袖ほしかねつ」とは、流した涙が雲のために乾くことがないという。その涙は宇津の山越えの心細さの故であるが、業平歌を思えば、「うつつにも夢にも人にあはぬ」ことからくる涙だと考えられる。こうした心細さや、逢いたい人に逢えない歎きを詠嘆的に表現したのが、結句の「あはれこのたび」である。しかし、『伊勢物語』との関連はかすかなものであるとしか言えない。俊成の批判は尤もであり、作者顕昭の意図は測りがたいが、「宇津の山」を『伊勢物語』を背景とした歌枕として位置づければ、作者の意図をくみ取ることができると言える。

『伊勢物語』歌を本歌とするという点に関しては、俊成にも苦い思いがあるといつてよい。「夕されば野べのあきかぜ身にしみてうづら鳴くなりふか草のさと」（『千載集』秋・二五）は自ら、『伊勢物語』に依拠する表現であることを表明しなければならなかった。³『伊勢物語』歌は「野とならば鶉となりて鳴きをらんかりにだにやは君は来ざらむ」（『伊勢物語』一二三段）である。俊成歌は「深草の里」に加えて、「鶉鳴く」ことが詠まれている。『伊勢物語』の場に加えて、もう一つ具体的引用がなされている。『伊勢物語』の歌枕を詠む際には、歌枕に加えて、さらに具体的引用が必要であると俊成は考えていたと思われる。他の場所と取り替えることができない、その歌枕らしい表現を求めている。

『伊勢物語』歌とのつながりは「宇津の山」以外には認められない歌を対象とする。

- ① ながめつる空行く月の行末に思ひもいでようつの山もり（『慈鎮和尚自歌合』「客人十五番」十一番右 旅恋）
- ② みやこおもふそなたの風を身にしめて月にともなふうつの山ごえ（『千五百番歌合』二九五番右・春 寂蓮）
- ③ 夕月夜露吹きむすぶ秋風にわが袖ひぬやうつの山本（『最勝四天王院障子和歌』三五三・宇津山駿河 通光）
- ④ むかしまで思はぬ袖もしをるらし時雨にまよふうつの山道（『正治後度百首』山路・七七二 季保）
- ⑤ おもひねのけさの袂もまだひぬに又くれかかろうつの山もと（『卿相侍臣歌合』羈中暮・廿三番左 慈円）
- ⑥ 都いでし日数かぞへてたれかけふおもひおこするうつの山越（『正治後度百首』山路・六七四 長明）
- ⑦ けふも又夕るる雲にやどりぬとみやこへつげようつの山風（『卿相侍臣歌合』羈中暮・廿四番右 越前）

①の「空行く月の行末」とは、月が沈み行くその先を指す。夜が終わり、夢の時も過ぎたのである。「月の行末に思ひもいでよ」とは、夢に思い人を見ることがなく、朝が来たとの歎きを意味している。この夢は業平歌の「夢にも人にあはぬ」の夢を引き継ぐものである。宇津の山守にせめて夢で逢わせて欲しかったと歎きを込めて訴えている。

②の初句の「みやこおもふ」とは、業平歌の「夢にも人にあはぬ」人のことを思うのである。都から吹く風を身に受け止め、月と共に宇津の山越えをすると言っている。恋しい都からの、そなたの風を受けつつ、月と共に宇津の山越えをすると言っている。『伊勢物語』のような歎き、悲壮感はない。むしろ、業平歌にはない、都からの風、山路を照らす月が一首を浪漫的なものにしている。業平歌を踏まえながら、業平歌とは違う新しい歌を詠出したと言える。③の上句「夕月夜露吹きむすぶ秋風に」は、夕月が夜空にかり、秋風が吹くことで露が固まり夜露となる景を詠む。秋風吹く中、夜空を照らす夕月と葉に置く露に焦点を当てた印象鮮明な景である。『伊勢物語』の暗く物心細い宇津の山と違う唯美的な景である。第四句「わが袖ひぬや」とは、流した涙が秋風によって乾くだろうかという切ない願いが見える。この涙は業平歌の「夢にもあはぬ」歎きからのものと考えられる。業平歌の逢えぬ歎きを前提として発想されている。この三首は業平歌にはない月を着想し、場面を夜に転じる新しさを演出している。月による絵画的印象は②③の例歌に顕著であるが、『伊勢物語』の場面を展開させることによって新味を出そうとしている。

④の「むかしまで思はぬ」の昔とは、この例歌にあつては、『伊勢物語』九段の業平の宇津の山越えの事蹟と考えてよい。その業平の「夢にも人にあはぬ」歎きのことに思いを馳せなくても「袖もしをる」と詠む。それは時雨のために濡れたのであるが、宇津の山とは、そういう涙流れる場であることを伝えている。道は暗く心細くなるからか、夢にも人に逢えぬからか、涙流す所として捉えられているのである。「時雨にまよふ」は、業平歌にない、新しい趣向である。「まよふ」とは、宇津の山道に迷うのであるが、夢にも逢えない現実には、恋の迷いをも重ねている。

⑤の上句「おもひねのけさの袂もまだひぬに」とは、夢でもいいから逢いたいと思ひ、寝たその朝、涙を流していたという。「おもひ寝」をしたのであるから、和歌的発想では、夢で逢いたい人に逢えたのである。それでも、涙を流したと言う。それは業平歌が夢にも逢えぬ歎きを詠じていたことを踏まえ、この例歌では、夢で逢えたが現実には逢うことは出来ないという歎きに転じたのである。夢で逢えたことを喜んで、『伊勢物語』の情調を大きく逸脱することになるからである。下句「又くれかかろうつの山もと」では、今、また夜を迎えようとする暗鬱な時を詠み、救いようのない宇津の山越えを詠じている。

⑥の例歌は、都を出立してからの日数を数えて、一体誰が、宇津の山越えをしている私のことを思い起しているだろうか、誰もいないという意である。都を出てからの日を数えて、今日、あの蔦・楓茂る暗い宇津の山越えをする私のことを思い起す人はいないという希望のない抒情である。この着想は、業平歌の「夢にも人にあはぬ」とは、逢いたい人が自分のことを思っていないからだという非情な現実からきている。都を出て幾日経ったのかという発想は『伊勢物語』には見られない。都にいる人は私のことを思っていないということの実際的な発想である。

⑦の上句「けふも又夕ある雲にやどりぬ」とは、昨日も今日もまた、この夕暮れ時、雲のかかる宇津の山に宿ることをいう。下句「みやこへつげようつ山の山風」は、そのことを都にいる人に告げよと都へ吹く風に訴えている。業平歌は、夢でも逢えぬ歎きを詠じていた。⑦の例歌はそうした歎きを昨日したのである。今日こそは夢にみたいという願いを込めて、今日も宇津の山で野宿することを伝えている。

①の例歌は、逢いたい人に夢でも逢えなかったという歎きを業平歌のように直情的に訴えることはせず、歎きを抑えて、夢にも逢えないことを批判している。その対象は宇津の山守であるが、実質は思っている人に対してである。歎きから批判へと転じている。②の例歌は、浪漫的であり、歎きの色調はなく、夢でも逢えないという歎きをする前の段階を構想している。時間を遡らせているのである。③の例歌は夢でも逢えない歎きをした後の場を美的に詠じている。時間の経過が見られる。

④⑤の両首は、『伊勢物語』の宇津の山越えを昔のこととして捉えるが、今も変わらぬものとして涙を詠じている。時を今に変えているのである。さらに、④は時雨に迷う、新しい着想がある。⑤は業平歌の「夢にも人にあはぬ」という非合理性を捉え、「思ひ寝」によって「夢」での逢いを実現させる、新しい着想がある。

⑥⑦ともに、「都」を詠出する共通点があるが、『伊勢物語』への対応は違う。⑥は、業平歌の「夢にも人にあはぬ」現実を自明として、我が身のこととして詠じている。『伊勢物語』を発想の元に置きながら、『伊勢物語』そのものからは離れている。一方、⑦は『伊勢物語』の内容に踏み込み、夢に逢えなかったことを昨日のこととし、今日は夢見られるようにとかすかな願いをもつて詠じている。⑥は『伊勢物語』の物語的場から離れ、現実の自分の場に変えている。⑦は『伊勢物語』の場から時間を経過させた場に変えている。

これらの例歌は、『伊勢物語』との関連を示す詞は「宇津の山」だけである。俊成がいう「うつの山ゆゑなくては、さまでよりどころなくや侍らむ」のような歌である。ただ、これら作者には、先ほど見た顕昭のような考えがあったと思われる。『伊勢物語』の古歌であってはならないと考えていたのである。そのため、業平歌の詞の直接的引用は意識的に避けていたと思われる。業平歌の「夢にも人にあはぬ」に一首の発想の源があるが、この歎きをいかに潜ませるかに工夫と詠作法があった。

三

『伊勢物語』の場面を彷彿させる「蔦」「紅葉」を詠み込んだ歌を対象とする。

- ① うつの山分行くつたの下露に物思ふ袖ぞいとどしをるる（『元久詩歌合』山路秋行・卅番右 蓮性）
- ② 蔦のいろむかしを今に分けなして心ばそきはうつの山みち（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三五二 僧正慈円）
- ③ 蔦のいろも移りにけりな宇津の山秋も更行くしぐれせし間に（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三五五 有家朝臣）
- ④ ふみ分けし昔は夢かうつの山跡ともみえぬ蔦のした道（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三五八 雅経朝臣）

⑤ 誰にかは風の便りもしらすべき紅葉ふりしく宇津の山道（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三五九 具親）
⑥ しられじな今も昔も宇津の山蔦よりしげき思ひ有りとは（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三六〇 秀能）

⑤は「蔦」ではなく、「紅葉」が詠出された珍しい例である。その他は、「宇津の山」「蔦」により、『伊勢物語』歌との関連がうかがえる。①では、「うつしの山分行くつたの」に宇津の山越えをする業平の姿を詠み、「物思ふ袖」に「夢にも人にあはぬ」歎きが表現されている。蔦の下露に濡れ、ますます涙の袖が濡れる趣向となっている。

②は「蔦」を「蔦のいろ」として捉えている。紅葉した蔦であって、「蔦・かへで茂る」『伊勢物語』との違いがある。②の上句「蔦のいろむかしを今に分けなして」は、「むかし（の色）を今（の）蔦のいろに分けなして」と考えられ、業平が宇津の山越えをした時の蔦の色が、今の紅葉の色に変わり、その中を分け行くという意だと思われる。宇津の山越えを心細く思う心は、『伊勢物語』のままであるが、季節を秋に変えた。それは、『伊勢物語』の宇津の山の不安を表現するに相応しい時として秋を捉えてのことである。

③の「蔦のいろも移りにけりな」は、蔦の紅葉も色あせたとして、暮れ行く秋の景を詠む。下句「秋も更行くしぐれせし間に」の時雨降る景は、紅葉を色あせさせた原因であり、一首に侘びしさを与えている。

④の「ふみ分けし昔」とは、業平が宇津の山を越えた昔のことである。その業平の山越えが夢なのかと思うほど蔦の様子が違う。どう違うのかについて表現されていない。雅経歌が、能因の「こころあらん人にみせばやつくのなにはわたりのはるのけしきを」（『後拾遺』春・四三）に呼応して詠まれた西行の「つづくの難波の春はゆめなれやあしのかれはに風わたるなり」（『新古今』冬・六二五）に発想が似ていることを思えば、生い茂る蔦の葉ではなく、枯れた蔦であったと思われる。『伊勢物語』の景は過去のもとなり、時の経過から免れないと言う。

⑤の上句「誰にかは風の便りもしらすべき」は、今、宇津の山越えをしようとしている自分のことを風の便りにでも知らず人は誰もいないと言う。それは、業平歌の「夢にも人にあはぬ」事実に対して、逢いたいと思う人は自分のことを思っていないからだとし、自分は愛されてはいないとして、自分のことを知らずべき人はいないと深い歎きを詠じている。業平歌の直情的な歎きではなく、現実を直視した上での諦観がある。下句「紅葉ふりしく宇津の山道」は、『伊勢物語』にはない景である。鮮やかな紅葉が散り行くという、華麗な中に散る悲しみの景は詠じられている。上句の抒情、下句の叙景という対照の中に、悲しみの心情が響き合う。

⑥は宇津の山は『伊勢物語』では、蔦茂る所であるが、その一杯な蔦よりも歎きの思いは多いと言う。業平や私のあれやこれやの多い歎きを、あの人には知られないだろうと詠じる。業平歌の夢でも逢えない歎きに自らを重ね合わせている。

①は『伊勢物語』に描かれた業平の姿に思いを馳せ、観察者の視点から描いている。②③⑤は蔦の紅葉を捉え、『伊勢物語』の宇津の山越えの場面は秋に相応しいとして構想している。さらに②④⑥は『伊勢物語』の山越えの場面に思いを馳せ、今との比較の視点をもつ。⑤は『伊勢物語』における宇津の山越えで味わった業平の歎きから自らの立場を理解した境地に立つての視点である。

四

『伊勢物語』の場面を彷彿させる「夢」「便り」を詠み込んだ歌を対象とする。

- ① あらし吹くたかねの雲をかたしきて夢路もとほしうつのやまこえ（『正治初度百首』 羈旅・七八四 忠良）
- ② 古里のたよりとならばことづてん袂にむかふうつの山風（『正治後度百首』 山路・二七三 雅経）
- ③ おのづからあふ人あらばことづてようつの山辺をこえ侘びぬとも（『式子内親王集』 三七二）
- ④ あづまぢやはるのゆくへをこよひより夢にも告げようつの山こえ（『千五百番歌合』 春・二九五番右 寂蓮）
- ⑤ 忘れずは都の夢やおくるらん月は雲をうつの山越え（『後京極殿御自歌合』 旅のこころを・八四番右）

①の上句「あらし吹くたかねの雲をかたしきて」は、業平歌の野宿に具体的な背景を与えている。「夢路もとほし」とは、夢で見ることが実現しがたいことを、「遠い」と比喩的に捉えた所が眼目である。一首は業平の行動や心情に思いを馳せ、それを観察的態度で詠じたと言える。

②の上句「古里のたよりとならばことづてん」は、『伊勢物語』の偶然出会った顔見知りの僧に都への手紙を託したという内容を踏まえての表現である。「袂にむかふうつの山風」とは、今まさに宇津の山越えをしようとする場を印象的に詠じている。「袂」に焦点が当てられているだけに、その袂に置くだろう涙が暗示されてもいる。

③の上句「おのづからあふ人あらばことづてよ」は、②と同様、『伊勢物語』の顔見知りの僧との出会いの場面を素直に和歌として表現している。結句「こえ侘びぬとも」は、『伊勢物語』にはない表現であり、「宇津の山越え」を難所とする理解からの発想である。便りを届けて欲しいという切なる願いが込められている。

④は春は今どのあたりなのかを今夜から、夢で告げて欲しい。東路の宇津の山にさしかかったという意である。「宇津の山」と「夢」とが詠み合わさっているが、『伊勢物語』との内容上の関係はない。詞の取り合わせを『伊勢物語』から学んだという体である。

⑤の上句「忘れずは都の夢やおくるらん」は、都の人は私のことを忘れないで、夢を送ってくれているだろうかと詠む。業平歌が、夢で逢えなかった歎きを詠むのに対し、例歌は夜の夢見る前の場を設定し、不安を抱きつつも夢での逢いを期待している。業平になりきっての作歌態度である。

④は内容的には『伊勢物語』の影響は見られない。夢での逢いが期待できないのなら、夢で春の行方を告げて欲しいと発想を転じている。①は業平歌の業平を第三者の視点で詠じ、②③⑤は業平の立場に立って、業平歌と違う場を詠じている。また、三の六首に比べて叙景表現に徹してはいない。業平歌の内容の一部に焦点をあて、その部分を一首の眼目として詠じている。

五

業平歌の「うつの山べもうつつにも」の同音の繰り返しに影響を受けている歌を対象とする。『拾遺愚草』の詞書に「人のもちたるあふぎに、うつの山べのうつつにもとかきたるをみて」（二六五三）とあるように、有名なフレーズであった。

- ① これなれや夢にも人にはあはずしてうつつにこえしうつの山道（『正治後度百首』 やまのみち・九七一 越前）
- ② 契りおくけふのうつつもうつつの山やまぢ絶えなばうたたねの夢（『正治後度百首』 山路・一〇七一 慈円）
- ③ うつの山うつつかなしき道たえて夢に都の人はわすれず（『水無瀬殿恋十五首歌合』 暮恋・三三番右 左大臣）
- ④ 日暮るればあふ人もなしうつの山現もつらし夢はみえぬに（『最勝四天王院障子和歌』 宇津山駿河・三五二 御製）

- ⑤ いろいろの木葉しぐるる露分けてうつつともなき宇津の山道（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三五四 俊成卿女）
- ⑥ 宇津の山うつるばかりに嶺のいろは分きてしぐるるやおもひ染めけん（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三五六 定家朝臣）
- ⑦ 踏分けてさらにやこえん宇津の山うつるふ蔦の岩のほそ道（『最勝四天王院障子和歌』宇津山駿河・三五七 家隆朝臣）
- ⑧ さぞなげく恋をするがのうつの山うつつの夢のまたしみえねば（『定家卿百番自歌合』無題・七三番左）
- ①の初句「これなれや」とは、業平歌の「夢にも人にあはぬ」歎きを自らが体験したことを表している。下句「うつつにこえしうつの山道」とは、今まさに宇津の山を越えたことを表している。業平歌をそのままなぞったような歌であるが、業平歌のような歎きはない。夢に逢いたい人が現れないという現実には驚いている。
- ②の初句「契りおく」とは、逢いたい人の夢を見ることのない宇津の山を越えたなら、うたた寝の夢に逢いたい人に逢うことを約束しておくことである。宇津の山は、業平歌に言う「夢にも人にあはぬ」所である。それは、宇津の山を越えると、逢いたい人を見ることができるということであると思いつたのである。業平歌の歎きを歎きのままとせず、希望的観測を詠じている。業平歌を前提としながら、業平の歎きに寄り添うのではなく、むしろ『伊勢物語』から離れ、作者自らの生き方を詠じた。
- ③の上句「うつつの山うつつかなしき道たえて」とは、現実には悲しいもので、逢いたい人に逢うべき手立てはないと歎く。業平歌の「夢にも人にあはぬ」を取り込んだ内容である。但し、例歌は下句「夢に都の人は忘れず」と言う。小町歌「思ひつつぬればや人の見えつらむ」（『古今』恋・五五二）と言うように、逢いたいと強く念じ、眠ることによって、夢で思い人に逢うことは出来るのである。
- ④の上句「日暮るればあふ人もなしうつの山」とは、『伊勢物語』宇津の山の「いと暗う細きに」物心細くあり、さらに出会った修行者の「かかる道は、いかでかいまする」という表現より導かれた具体的な場面である。下句「現もつらし夢はみえぬ」は、業平歌の「夢にも人にあはぬ」を踏まえ、その現実を「現もつらし」と一言で言い当てたのである。
- ⑤の上句「いろいろの木葉しぐるる露分けて」とは、さまざまに色づいた木の葉に時雨が降り、その時雨が葉に置く露となり、その露を分けて歩むと言う。細かな自然描写がクローズアップされて表現されている。下句の「うつつともなき宇津の山道」とは、宇津の山越えが現実とは思えないと言う。「うつつともなき」との思ひは、宇津の山の小暗い様子や、「夢にもあはぬ」現実に対しての思ひであろう。業平の経験を再現しているが、主情的にはなく、具象的な自然描写を通して、業平の心情を表している。
- ⑥の上句「宇津の山うつるばかりに嶺のいろは」とは、蔦の葉が顔に映るほど濃く紅葉していることを表す。下句「分きてしぐるるやおもひ染めけん」は、時雨が格別思いを込めて紅葉させたことと詠む。旅の恋の歌の業平歌が印象鮮明な叙景歌へと詠み替えられている。定家の本歌取り論「以恋・雑歌詠四季歌」（『詠歌大概』）に叶う詠み方である。ただ、作者が定家であることを思うと、「思ひ初む」「時雨」には、人知れず恋し始め、涙を流す片恋を表しているように思われる。「うつるばかりの嶺のいろ」とは、恋する心の顔色への投影と見ることが出来るようにも思う。『伊勢物語』の恋の悩みを、片恋の歌に替え、それを叙景として表現したとも考えられる。
- ⑦の上句「踏分けてさらにやこえん宇津の山」は、宇津の山をさらに越え行かんとする意志の強さが解される。下句「うつろふ蔦の岩の細道」は、岩の細道に色あせた蔦の紅葉の景を詠む。『伊勢物語』の宇津の山の暗く、心細い山路を、色あせた蔦、岩の細道という具象的な叙景で表した。
- ⑧の上句「さぞなげく恋をするがのうつの山」とは、さぞかし業平のような恋の歎きをする事になると言う。下句は上句の思ひの根拠となる考えで、「うつつの夢」を二度と見ることがないからと言う。「うつつの夢」とは、夢のような体験の意であるが、『伊勢物語』にはない内容である。業平に同化

しながら、そこにとどまらない自己認識がある。

これらの例歌は『伊勢物語』歌に見える「うつ」の同音の繰り返しに倣った、独創的表現を創出している。特に、③の「うつつもかなし」、④の「現もつらし」、⑤の「うつつともなき」は業平歌の中心的抒情を簡潔・的確に言い得ている。『伊勢物語』に範を取ったことが明らかにされているだけに、発想は『伊勢物語』に密着している。業平の言動に寄り添うように詠じられている。その上で、①④⑤⑧には現状への冷静な認識、②は願望、③は前向きな姿勢、⑦は山越えへの強い意志を詠じる。⑥については、業平歌との直接的な関連は見出したい。宇津の山を紅葉の名所と解しての詠と考えられる。

六

『新古今』に入集した三首を対象とする。この三首が『伊勢物語』歌の享受の典型を示すとは言えないが、新古今時代のあるべき享受の一端を示していると思われるので、考察しつづまめとする。

- ① 旅ねするゆめぢはゆるせうつの山せきとはきかずもる人もなし（羈旅・九八一 家隆朝臣）
- ② 宮にもいまや衣をうつの山夕しも払ふつたのしたみち（羈旅・九八二 定家朝臣）
- ③ 袖にしも月かかれとは契りおかず涙はしるやうつの山ごえ（羈旅・九八三 長明）

①の上句「旅ねするゆめぢはゆるせうつの山」とは、「宇津の山」は業平歌の「夢にも人にあはぬ」場であることを前提にして、それでも夢での逢いを願っているのである。下句「せきとはきかずもる人もなし」はその願いの根拠として、宇津の山は関でもなければ、関守もないのだからと詠じている。例歌は業平歌の内容に即して詠じてはいない。業平の歎きへの同調や同情はない。むしろ、業平の出来事は過去のこととする姿勢である。ただ、それは消えゆく過去ではなく、今も猶、影響力をもつ存在感のある歌として認識している。

②の上句「宮にもいまや衣をうつの山」は、宇津の山越えにあたって都を思い、衣打つ頃だろうかと想像している。業平歌の「夢にもあはぬ」歎きが、都のことをさびしく思い出させている。下句「夕しも払ふつたのしたみち」は、袖に置いた夕霜を払いながら蕙の紅葉の下道を歩むという視覚的印象鮮明な叙景となっている。窪田空穂氏が「旅情とはいが、そこには一点のわびしさもなく、わびしいことも艶に、またさわやかな気分を持ったものとして」⁸⁾と考察されたように『伊勢物語』歌を本歌としながら、本歌から独立した新しい歌となっている。「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」（『近代秀歌』）という、定家の本歌取りの典型を示す歌である。

③の上句「袖にしも月かかれとは契りおかず」は、袖に流した涙に月が宿ることを約束してはいなかったというのである。宇津の山越えにあたって涙したことを歎いている。下句「涙はしるやうつの山ごえ」は涙するに至った原因を涙に問うている。業平歌が業平の歎きを直情的に詠じるのに対し、③の歌は原因を知りつつ質している。業平歌のように「夢にも人にあはぬ」とは言わず、それは都の思い人が自分のことを思っていないからだとも言わない。③の歌の場は、業平が夢にも逢えず歎いたのと同じである。歎きにじつと耐えている姿を詠む。業平の心情を掘り下げた感慨であった。

三首ともに、業平歌の表面的な撰取ではない。①は業平歌を過去のこととして対照化して、今を詠じる方法である。これは、良経歌「宇津の山こえしむかしのあとふりて」（『六百番歌合』）、「これなれや夢にも人にあはずして」（『正治後度百首』）の影響が考えられる。②は旅恋の業平歌を、叙景歌に変えている。これは、良経歌「つたのかれ葉に秋風ぞ吹く」（『六百番歌合』）など、多く試みられた、『伊勢物語』の場面「いと暗う細きに、蕙・か

へでは茂り、物心細く、すずるなるめを見ることと思ふ」の叙景表現や、業平の心情を叙景で言い流すことなどからの影響を受けた方法である。③は、業平歌の場の、業平の心情を掘り下げ詠じている。

新古今歌人たちの享受には、業平歌についての解釈が前提としてある。良経歌「夢に都の人はわすれず」は、夢で逢いたいと自分が思うことによつて夢では逢えるということ詠じており、業平歌の「夢にも人にあはぬ」という発想の非合理を突いたのである。こうした、業平歌を表層的にはなく、解釈をするところからの詠歌方法である。その他、広く見られるものとして、業平歌の歎きに相応しい場として、秋・夕・夜が設定され、歎きの中にも華やかさの演出として、紅葉・月が配される。業平を自らに重ね合わせて心情を詠む作歌態度であるが、業平の心情を直接的に詠じることはなく、心象風景として詠じる。また、クローズアップされた景が印象的鮮明である。業平歌と場は同じであっても、時を変えることによって新しさを出すようにする。『伊勢物語』との深い関連が見られる歌もあれば、希薄な歌もある。ただし、表現上関連性が薄くとも、作者の作意は『伊勢物語』につながることであった。

註

- (1) 片桐洋一氏著『伊勢物語全読解』(和泉書院・二〇一三年刊)において、以下の点に根拠を置いておられる。「第九段のこの部分、少なくとも壬生忠岑以降の作と見るのが自然だからである。『在中将集』や『素寂本業平集』などの『業平集』諸本にこの歌は採られていない」
- (2) さらに、顕昭は、「雲降る場所」を『万葉集』に四首認めている。「雲降り板間風吹き寒き夜や旗野に今夜わが独(り)寝ん」「雲降る遠つ大浦に寄る浪のたとひ寄るとも憎からなくに」などである。
- (3) 「これ又ことなる事なく侍り、ただいせ物がたりにふか草の里の女のうづらとなりてといへる事をはじめてよみいで侍りし」(『慈鎮和尚自歌合』七番・判詞)
- (4) 谷知子氏は「もし忘れないならば、都の夢を送ってくれるだろうか、私と同様に、月も空高く宇津の山越えをしている」(『和歌文学大系60 秋篠月清集/明恵上人集』明治書院・平成二五年刊)と口語訳されている。
- (5) 久保田淳氏は「顔に映るほど濃い宇津山の峯のみぢの色は、とりわけ時雨が深く思つて染めたのだろうか」と考えておられる。(『訳注藤原定家全歌集』河出書房新社・昭和六〇年刊)
- (6) 註(5)に同じ。同書に「恋をする私は業平と同じように嘆いています。昔、業平が駿河の宇津の山で見た夢のように、現の夢(夢のような体験)は二度と見れない(訪れない)ので」と口語訳されている。
- (7) 窪田空穂氏は「本歌取としての関係はない」とみておられる。「普通の旅情であるが、『関とは聞かず守る人もなし』と四五句を費やしているところに、実際に即した、同時に哀切な心がある」と解される。(『完本新古今和歌集評釈』東京堂出版・昭和三九年刊)
- (8) 註(7)に同じ。

【付記】テキストとして、『伊勢物語』は、片桐洋一氏著『伊勢物語全読解』(和泉書院・二〇一三年刊)、『六百番歌合』は、小西甚一氏編著『新校六百番歌合 付・顕昭陳状』(有精堂・昭和五十一年刊)、和歌は、『新編国歌大観CD-ROM版Ver2』(角川書店)、歌論書は『新編日本古典文学全集 歌論集』(小学館・二〇〇二年刊)を用いた。